

# シリーズ 評論

北の隣人

第四部

## 日ソ交流をどう考える

70

新体制「あらしの一年」

ゴルバチョフ体制のソ連がスタートしてから、もう一年が過ぎた。この間、ソ連の変化はきわめて大きかった。政治的にはブレジネフ時代以来のリーダーシップの硬化化とジェロントクラシー（老人支配体制）を二禁にくつがえし、

経済的には、科学技術革命と生産の効率化を求めて大胆な改革に着手しはじめた。

ゴルバチョフ書記長は、みづから「現実主義」という言葉を頻用して内外情勢に対応しようとしており、また、過去のソ連共産党第二十七回大

会を「スターリン批判」を敢行した二十回大会の三十周年を最近著しく関係を改善した。中国の指導者自身、従来のよ

# まず二島返還の道を

東京外国語大学教授 中嶋 嶺 雄

のソ連が抱えている社会的・経済的弊弊は、あまりにも深刻であって、一朝一夕に癒やすことなど不可能である。それだけに、対外的にはソフトムードで出ざるを得なくなってきたともいえよう。

「領土は時間との戦い」

だとすれば、北方領土問題を含む日ソ関係改善のチャンスは増大しつつある、と一般

ことではないだろう。

そもそも日本外交は、七〇年代末期までの歴史的な中ソ対立を外交的に利用すること

を怠り、おそらくもう二度と訪れることのない、あの深刻な中ソ対立という千載一遇のチャンスを見送ってしまった。それどころか、一九七八

年の「棚橋」条項入り日中平和友好条約の締結に見られるように、一方的に中国側に傾

譲歩（本来、日本の立場からすれば、ソ連の譲歩）をどこではないのだが）をとりつけて妥協し、残りの二局については、あくまでも領有権は主張しつつ、共同利用が共同開発、もしくは二島買取りへの道を探ることがもつとも現実的であろう。さもない限り、永遠に四島返還を主張しつつ時間経過を待たず以外にない。この二つに



昭和四十年東大大学院国際関係論課程修了、社会学博士。五十二年東京外国語大学教授。この間、在港外務省特別研究員、オーストラリア国立大・パリ政治学院客員教授などを歴任。現代中国学を専攻、主な著書に「中ソ対立と現代」「北京烈々」など多数。長野県松本市出身、四十九歳。

目に合わせて開催するなど、ソ連の新しい転換への並々ならぬ意欲を感じさせずにはおかない。しかも、従来のソ連は、対外的にはなにをやるに

も、宿敵・中国の存在に拘束され、中国に足を引っぱられてきたのだが、その中国とは

うなソ連脅威論からほぼ完全に脱しているだけに、ソ連の行動余力はこの点でも大きくなっていると思わなければならぬ。

もとより、このようなゴルバチョフ路線の展開にもかかわらず、社会主義大国として

には見られるかもしれない。だが、これまでの日本外交がいわば米中双方の反ソ戦略に乗じて、ソ連の対日依存度を高めるような政策をとってはこなかっただけに、当面、日ソ経済関係の改善はあり得て

も、領土問題の解決は容易な

斜して、日本の対ソ・パーゲニング・ポジションをみずから損なってきたのである。

このような経緯を顧みれば、半世紀以上もたった領土問題を外交交渉で決着するこ

つしか基本的な選択肢はないのではないか。ソ連は既成事実をつくって譲れない国だから、もしも北方領土問題の解決が二十世紀末まで延びれば、半世紀以上もたった領土問題を外交交渉で決着するこ

かいかねばならない。

あすは作家

野坂 昭如氏

な